

視点 //

挑戦意欲のある子どもに育てよう

岡山大学大学院教育学研究科教授

高橋 敏之



人を育てるに、近道はありません。その時々の年齢に応じて、時機を逃さず、コツコツと地道に働きかけることが求められています。幼児教育の現場においても、知育・德育・体育・美育・食育など、バランスの良い育ちに気を配りながら、子どもの成長を促すための粘り強い取り組みが為されています。同時に、教育的な取り組みには検証と見直しも大切です。「子どものために」と思ってやっていることが本当に望む結果に繋がっているのか、折に触れて再確認する必要があります。例えば、子どものやる気を引き出すために、褒めて自信を持たせることは良いことだと考える人は多いでしょう。しかし、褒めることで逆に子どもの意欲を抑制してしまう場合があることはあまり知られていません。

私達は、日々の養育や教育の中で、子どもに対して「早いね」「上手だね」「良くできたね」「それで合っているよ」などと言ってしまいがちです。すると子どもには失敗や間違いを回避したい気持ちも芽生えます。その気持ちが育ち過ぎると、失敗や間違うことを恐れて物事に挑戦するのを尻込みしてしまう事例を生むことがあります。何事にも挑戦しなければ、失敗と間違いを完全に回避することはできませんが、それでは当初の教育の目的とは真逆の結果を招くことになります。L.G. カツ (1998) は、「教師と子どもの関係が、その子どもの行為とその出来具合に支配される傾向があるのではないか」と指摘しました。確かに褒めることは大切ですが、行為の達成や成功、出来映えだけを第一義に考えず、遅かたり、下手だったり、失敗したり、出来が悪かったり、間違ったりすることにも多くの学びがあることを私達大人が忘れないようにしたいものです。

同様の問題として、他にも気にかかることがあります。長年、幼児教育の研究者として子どもの様子を見ていると、「～してもいいですか」という許可を求める言葉をよく聞きます。それ自体はごく普通の光景ですが、時に失敗しないことを最優先する余り、自分で考えて判断するのを初めから放棄しているかのように、子どもが細かく頻繁に教師の指示を仰ごうとする場面に遭遇すると、本当にこれで良いのかなと少し心配になります。一人の教師が多人数の子どもを教育する実践現場では、学校全体や学級を適切に管理する上で的確な指示は必要です。ただし、度が過ぎると子どもの依存心を強くするだけで、自立に向けた育ちを抑制することにも繋がります。現在の教育に、子どもに失敗させない、もしくは失敗を許さない傾向がないか、振り返って反省する必要がありそうです。

「失敗は成功の母」。年齢に関わらず、失敗した時こそ、その原因を突き止め、改善していけば、より大きく成長することができます。物事は失敗から学ぶことが多いのですが、大人の側に子どもの失敗を許容する余裕が無くなっているのかも知れません。そういう環境では、次第に子どもは萎縮して、意欲的に取り組む姿勢を持続することが難しくなります。失敗しないように、ことごとく大人が先に手を打ってしまうのは、子どもから成長の機会を奪うことにはなりません。先ずは、子どもの頃から成功も失敗も含めた豊かな直接体験を数多くさせることが、必要ではないでしょうか。人が生きていく上で、失敗に動じない心の強さも不可欠です。子どもが様々な体験を糧にして、生涯学び続ける姿勢を持つ人に育ってほしいと心から願っています。